

『教育公論』一九四九年三月(明治図書出版)

現代教育思潮の概観

—石山修平氏の民主教育論—

矢口 新

- A 石山さんが『民主教育論』というのを書いたね。
- B ああ河出書房の教育文庫にだろう。読んだよ。
- A どうだい、今どき民主教育論というのは何か僕のセンスにピッタリ来ないものがあるような気がするのだが。
- B ふーん、そういう事もあるかも知れないね。僕は必ずしもそうは思わないが。君は読んだのかい。
- A いや実はまだ読んでいないのだ。そこで君の感想を聞きたいと思ってるね。
- B とにかく、読み給え、いろいろな意味で面白いし、考え方を練る上にも参考になる。大体が石山さんのフィロソフィーだからね。明日すぐ役に立つというものではないけれど。
- A 石山さんの哲学というわけだね、民主教

育というのは。

- B そうだよ。民主主義を人類永遠の理念の現代的表現という風に解するわけだ。だから終戦後流行した民主教育という単なる言葉と一既に考えてはいけないよ。
- A 併しどうも民主主義という言葉は最近の日本では不当に多く使用されるね。何でも都合のいい時に持ち出すからね。
- B まあ、それはレッテルの問題だが、石山さんの教育論はレッテルの問題ではないよ。人間の理念を現代的に表現したものと考えるわけだね。あとで誰かが名前をつけて民主教育論と言ってもいいし、何と言ってもいいさ。ともかく石山さんの理想主義が表現されているよ。
- A そうすると此の著書は石山さんの理想主義の表現だというのか。
- B いや、そういうわけではない。僕は簡単に人の思想を類別することは嫌いだからね。石山さんの結論は、石山さん自身に聞く方がいいよ。序説と結論に出ている。とくに結語の「主よ！いざこへ！」というのは石山さんの情熱をあらわすものだね。僕はここに出ている思想が、この書全篇を貫いていると思う。その点で余りに観念的だという感じは持つがね。
- A その結語の内容はどういう事なのだ。
- B つまり、本書全篇が人類の永遠の理想を

求めて来た。それに対する信念の表白だな。現実をもつと醜悪であり、悲惨ではないかという論が成り立つね。それをどうしたらいいかと問う、それだからこそこの人間の理念が生きて働くのだというのだ。地上にありながら神的なる世界への—永遠の理念への—精進を続ける者を、神が見捨てるはずはない。この信仰がわれわれを起ち上らせる。というのが石山さんの信仰なのだ。教育の職にあるものに現在この信念が欠けていることは不幸なことだよ。

- A 併し、それは現実が問題だと僕は思うな。それは成程石山さんの言う通りだ。窮局に於いて人間の問題、信念の問題に帰着するといえるかも知れないが、同時に、現実の条件を如何にととのえるかという問題にも帰着するといえるからね。
- B それは僕もわかる。そこに実践とか政策とかの問題が横たわっていることも確かだ。
- A その問題については石山さんは具体的にどういつているのかね。
- B それは第一章から一つ一つ説いて行く所だから、一々言うのは大変だよ。
- A では僕が聞こう、日本再建と民主主義というのがあるね、第一章の民主教育の史的地位の中の第一節だが、ここにはどういうことが書いてあるかね。
- B それは一般に言われていることさ。民主

主義の生活体制を建設することが日本の再建の道だということさ。

A そうか、僕はまた、日本再建のために民主教育の日本的なあり方が述べられているかと思つた。その次に続く二節は日本の新教育運動の歴史のようなものらしいが、第四節に現代の新教育運動と民主教育という第一章の結論があるね。これを話してもらいたい。

B それは、現在の新教育運動が過去のそれとどう違わねばならぬかを解いているのだ。要するに曾つてのそれはブルジョア的新教育運動だったというわけだ。即ち民間の一部の進歩的教育者の仕事にまかせられて、国家が積極的に支持しなかった。とくに新教育実施上の最大の難関たる入学試験について改革の熱意がなく、そのために新教育運動は父兄の不安と反対とを招きついに後退衰微するに至つた。という様に述べられてある。

A そうすると具体的にはどうならねばならぬことになるのかね。

B それは、国民全部の実践の方法の問題だろうが、その点はこのではふれられていないよ。地域社会学校の考え方の辺で、そういうことがもう少し詳しく述べられると面白かつたろう。

A 第二章は反民主教育の清算という題だ

B ここは軍国主義や極端な国家主義につ

いての根本的な考え方が述べられている。前者に対して絶対平和主義、後者に対しては正しい民主的な国家主義を対立させてその基本的考え方を展開している。教育者の教養としてもつべきフィロソフィーだな。

A 別に教育に関して具体的な事はないわけだね。

B そう。そういうものがここでえぐられると面白かつたろうね。民主主義一般論でなくて現にわれわれの生活と感情と習慣になつている具体的なものについて述べられて欲しかつたという気もするな。そうでないと単なる御説教になるおそれもあるからね。その辺が君のいう今時民主教育論ではという所かも知れないな。併し、そこまで今ここに要求するのは無理だよ。その点は第三章の民主教育の原理についても同様だ。

A 民主教育の原理というのは、何と何かね。

B 人間性の開発、人格の形成、個性の伸長、社会性の強化、文化の向上となつている。その基礎理論だね。この辺は博引傍證、歴史的にも論じているし、中々面白いよ。簡明で要領よくまとまっている点ではさすが石山さんだよ。

A わかつた。その辺がこの書物の名前にもつともふさわしい所だというわけだね。

B まあそうだ。それを根本に置いて、第四章以下が具体的に日本の教育運動、動向など

を解いてある所だ。

A 第四章は教育基本法の解説かい。

B そうだ。憲法や、教育基本法に於ける考え方の解説だ。その基調にあるのははじめに言つた石山さんの信念だよ。だから無味乾燥な解説でなく個性があつて面白いし、ためにもなる。

A 第五章は……。

B 教育の一般目標が中心だ。学習指導要領にある例だの、それに基いて各段階の教育目標が詳しく紹介されている。

A 第六章以下が内容方法に関する問題だね。

B そうだよ。第六章でカリキュラムの構成原理が述べられ、第七章で、単元学習、分団学習、討議学習が述べられ、第八章で地域社会学校の事が述べられている。

A 石山さんの考え方が強く出ているかね。

B いや、そういうものでなく、むしろ現代の一般的動向の紹介というが如きものだね。これからの問題が多く含まれているよ。とくに石山さんもいつているように地域社会学校についてはこれから実証的に研究しなければならぬものが多いわけだ。

(中央教育研究所員)